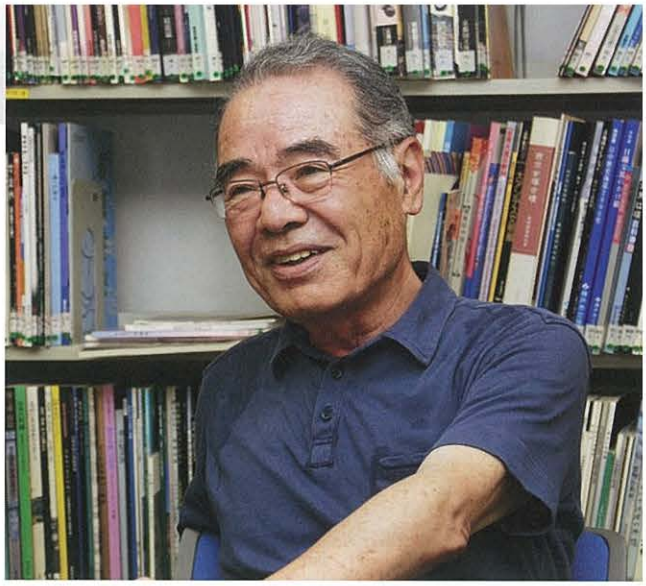
●インタビュー

INTERVIEW 橘川俊忠

非文字文化とは何か



きつかわ としただ　1945年中国北京市生まれ。東京大学法学部卒業。専攻は日本政治思想史。神奈川大学名誉教授。1996年より神奈川大学日本常民文化研究所長を務めた。1978年の同研究所入所以来、全国各地で文書・書籍の史料調査をおこなってきた。著書に『歴史解読の視座』（共著）『「民族と国家」の諸問題』（共著）『芦東山日記』（校訂）など。

――きょうは非文字文化についてお話を伺おうと思いますが、そもそも「非文字」とはどのようなものなのでしょうか。

要するに文字以外の資料ということで、あらゆるものが入ってしまいますが、一九八二年に神奈川大学の付属施設となった日本常民文化研究所が非文字資料研究センターの出発点にあります。常民文化研究所は澁澤敬三さんがはじめたものですが、澁澤さんは「民具」というモノを研究対象としてとりあげ、また中世の絵巻物の中から常民の生活の様子を探ろうとしました。澁澤さんは索引というものをとても重視していて、「絵」も索引化したいと考えて、そのために絵巻物の中で物語の筋とまったく関係のない、例えば人びとの使っている道具や扇子の骨から外を覗いている動作の絵柄などをそこだけ切り取ってデータ化して、その意味を探ろうとしました。これが絵の索引、つまり「絵引き」です。

文科省のCOEという特別の研究助成があって、非文字を研究テーマに応募したときのことですが、審査員の一人が非常口の場所を示すボックスを指差しながら「あれも非文字資料か？」といきなり言うので一瞬言葉が詰まってしまったけれど、あれもまさに非文字資料です。あの走る人の形も実は時代によって変わっているんです。歩行者信号の歩く形も変わっています。それはどうしたら正確にメッセージの内容が伝わるかという工夫が繰り返されているからで、その変化の過程を学問の対象にしようというのが非文字資料研究です。それはモノを見る「見方」の問題であって、我々が文化というものを対象化して考える際に既成観念の枠を取り払ってまったく別の観点から対象を見ること、それが非文字資料の研究のはじまりです。

――では「非文字資料」という学問ジャンルは日本だけのものですか。

「非文字資料」というネーミングは日本独自ですが、最近、外国からも注目を集めています。特に中国にはほとんど同じ趣旨の研究センターがつくられていますが、中国では図像資料の研究が中心です。もともと図像資料の研究はフランスのアナール学派が歴史や文化の変遷を考える際に図像を資料として取り入れようという流れとして一九六〇年頃から取り組んでいます。

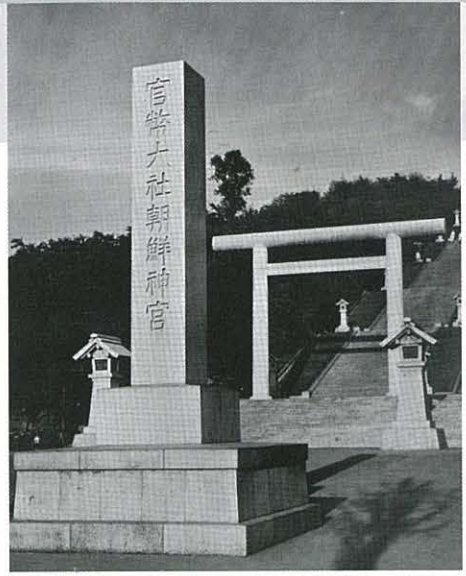
フィリップ・アリエスという学者が、子どもがそれ自体として独立した存在として見られるようになったのはブルジョワ革命以後で、それまでは子どもは「小さい大人」でしかなかったという有名な『子供の誕生』を書いていますが、それは、例えば絵画を見るときに美術評論家や美術史の研究者が絵画を見る視点ではなく、そこで子どもがどう描かれているかということだけを取り出したことで発見されたものです。しかしそのためには専門の枠を越えなければならないけれど、「非文字研究」はそこが面白いんです。

海外神社の研究

――本誌一九四号で写真家の稲宮康人さんが撮った海外神社の写真を掲載しましたが、あれは「非文字資料研究センター」として取り組まれている研究の一部だったんですね。しかし海外神社を非文字資料と言われると、わかるようなわからないような……（笑）。

これはなかなか難しい問題ですが、景観としてそこに何が読み取れるかということなんです。それで「跡地」を取り上げました。例えば伊勢神宮の江戸時代の絵を見ると、木はパラパラとしか生えていません。太古からの自然が維持されているという伊勢神宮に関する我々の固定観念（イメージ）は近代以後に形成されたもので、景観は時代とともに変化します。その変化が海外神社の跡地に非常にドラスティックに現れるんです。もちろん、跡地と言っても完全に破壊されていたり、別の用途に使われていたり、さまざまな形があるわけですが、その始末のつけ方にどんな政治的、社会的意味があるのかといったことがわかりやすく見えてくるんです。

実際、台湾と朝鮮では扱いがまったく違います。朝鮮半島は朝鮮戦争のせ



朝鮮神宮、京畿道京城府、1919年創立、齋藤総督の揮毫

いもあるけれど、ほとんど何も残っていません。しかし台湾にはいまもかなり残っています。戦争などで台湾のために命を落とした人の名前が刻まれた「忠烈祀」が台湾各地にありますが、これには日本時代の神社の跡地を利用したものが少なくありません。中には鳥居から拝殿から社務所まで残っているものもあります。ところが近くの公園に大きな石のテーブルがあって、よく見たら灯籠の笠をひっくり返している。要するに廃品利用なんです（笑）。

お墓のあり方も非文字資料の研究対象になりますが、例えば沖縄のお墓と中国の南部地方のお墓の外見は亀甲墓でよく似ていますが、沖縄のお墓は一族が全部入るのに対し、中国のお墓は一族ではなく、夫婦で入るものなんです。夫婦だけのお墓だから、墓参りする人がいなくなると廃品になり、最後は自然に戻るんです。自然どころか鶏小屋になっているのもあります（笑）。

また上海などの租界地の建物は日本本土より立派でいまも使われています。これは国内では自由に仕事を出来なかった建築家が腕をふるったこと、労賃が本土より安いことなどが考えられますが、もう一つの理由はヨーロッパに見栄をはったからです。国内は貧困にあえいでいても外に対しては見栄をはる。それはいまも変わっていないでしょう。国際競争には勝たねばならないと思い込んでいるのは戦前と同じですね。

――中国本土にも神社をつくったのですか？

つくっています。激戦地で大虐殺のあった南京にも南京神社をつくっていて、私もさすがに驚きましたが、いまも残っています。それから神社ではありませんが、関東軍の本部は吉林省の党委員会の本部としていまも使われています。なぜ日本帝国の建物を使っているのかと聞いたら、「頑丈だから」って、それだけ（笑）。

そもそも神社を海外につくっていいかどうか、戦前にも一応議論はあったんです。本来、日本の神社は日本の自然風土の中に存在しているので、外には出て行けないんです。本居宣長が近世の神道の根幹をつくったわけだけれど、彼は海外進出には大反対したでしょう。なぜなら日本はイザナギ、イザナミがつくった特別の国なんだから。それがいつの間にか朝鮮も台湾も同じ日本だという理屈をつけ、日本帝国の海外進出と合わせて神社も出て行くことになったわけです。

しかし台湾も朝鮮も大八洲の国とは違う原理でできているから、彼らを日本人にしても二級の日本人として扱う差別構造ができてしまい、戦争に負けたら海外に建てた神社もすべて捨ててしまうわけです。日本人の移民がつくった神社がブラジルやハワイに少しありますが、神社本庁は神社として認めていないので、現在、海外神社は一つもないことになっています。神社本庁としてはご神体はすでに回収したから後はどうなっても構わないという理屈でしょう。しかし、こんなことはキリスト教ではあり得ないことですよ。ここに我々が反省しなければならない本質的な問題が現れていると思います。

――ブラジルの神社は日本人街のようなところにあるのですか。

かつては日本人の入植地にありましたが、いまはサンパウロなどの都市にあるようです。日本人は比較的高学歴なので、子どもが成長すると日本人入植地から出てしまうということもあるのでしょうが、古くから知る人は日本人はブラジルの社会にとけ込んでいなくなったと言いますね。チャイナタウンやコリアタウンは百年経っても存在しています。

歴史学者の網野善彦さんと話をしていたときのことですが、網野さんが日

建国忠霊廟、旧満州、新京（現・長春）市、1940年創立、撮影：津田良樹（2012年）
写真２枚とも神奈川大学 日本常民文化研究所 非文字資料研究センター〈海外神社（跡地）に関するデータベース〉より

ブラジル大神宮、ブラジル・サンパウロ市（撮影：橋川俊忠）

本人は天皇以外、すがるものがないんだと言うので、あなたは天皇主義者になったのかと言うと、いやそういう意味ではなく、客観的に日本人を定義しようと思ったらそれしかないんだと。例えば戦国時代、東南アジアに日本人街がたくさんあったけれどいまは跡形もない。しかし同じ頃に進出した中国人街はいまも存在している。そんなことを考えると、日本人は最終的には天皇しかよりどころがないことを客観的事実として認めざるを得ないのではないかというわけです。果たしてそういう理屈でいいかということは疑問として残るけれど、一つの考え方としてはあり得ると思います。海外神社はまさに天皇制と密接に結びついているわけだから。

――では海外神社は伊勢神宮風の神社が多いのですか。

大体そうですが、タージ・マハルみたいなものもあります（笑）。満州の建国忠霊廟という神社は全体の形は中国風、ご神体を納めているところは蒙古風と、当時の五族協和のスローガンにそった形になっています。これとは別に、満州皇帝の宮殿の中に建国神廟という神社がありましたが、それは伊勢神宮そのままです。つまり大衆向けには五族協和を押し立て、権力の深部に日本の神社が隠れているわけで、これは満州国の実体そのものを現している、それを見なければならないと学生たちにも口を酸っぱくして言っているんですが、なかなか難しい課題です。要するに非文字資料としての神社は、神社なのか神社ではないのかという問題を判断する視点とはつながらない、別の視点が必要なんです。

――非文字資料としての海外神社を考えるためにあえて跡地を探るんだと言われましたが、それが現にいまも存在している場合はどういうことになりますか。

例えば、台湾には観光資源として神社をそのまま復原しているところもありますが、どうしても中国風に見えます（笑）。ブラジルで成功した日本人が日本から部材を輸入して日本風の家屋を造り、ブラジル政府から史跡に指定されていますが、これもどう見てもブラジル風です（笑）。だとすると、僕に言わせれば、伝統的な純粋な日本文化なんてどこにあるんだという話になるわけです。つまり、重層的にものが見えているかどうかが大事なんです。

枠組みを超えて

――日本にしかない非文字文化というものもあるのですか。

定義の仕方によりますが、引こうが押そうがノコギリに変わりないけれど、「引く」ノコギリは日本にしかありません。「押す」行為と「引く」行為は他のことと関係があるのかと考えると、例えば日本人の多くはマッチを手前に引くけれど、ヨーロッパ人は外に向かってこする。これを他人に気配りしていると価値づけると「おもてなしの精神」みたいになっちゃって面白くないけれど（笑）、違いがあることは事実ですね。

――文化とか文明とか言いますが、その違いはなかなかわかりませんね。

「発展」とか「進化」という理念と結びついた価値評価の中で言われる文化現象を文明と言い、その価値評価を離れてタイプ化したものが文化です。だから「文化」と「文明」の違いは対象の中にあるのではなくて見る側のものの見方の中にあるんです。ちょっと前、ハンチントンはキリスト教、イスラム教、儒教、仏教を基軸に『文明の衝突』を書きましたが、そういう基軸があるかどうかもそんなにはっきりしていないと思います。

これもブラジルの話ですが「アパレシーダ」という一度に数万人も入れる巨大な教会があります。ここでは現地の漁師の網に引っかかった褐色のマリア像が信仰の対象で、浅草の観音様と同じです。信仰目的も現世利益そのもので、そのお礼として寄贈された物品が教会の中に山のように積まれています。これがカトリック信仰のありようで、大衆が受け入れているレベルでは浅草の観音様と同じです。実際、サンパウロにある神社に参拝する人はブラジル人の方が多いそうです。漢字のお守り札がカッコいいって（笑）。

でもカトリックの聖人もみんな同じようなものでしょう。現地で信仰を集めている人を聖人として取り込んでいるわけだから。それを絶対にしないのがプロテスタントで、だからイスラム原理主義とぶつかるわけです。日本で言えば「死ねば極楽へ行ける」と叫んだ一向一揆はイスラムのジハードと同じです。でも自分を覆っている鎧、枠組みを外すと、共通点が見えてくる。非文字文化は枠組みを越え、多元的に考えることを要求するんです。そしていろいろな層から見ていくことで物事をより深く考えることができるし、それが大事なんです。